

調和のとれた矢作川流域圏の実現に向けて

国土交通省豊橋工事事務所 ○ 手塚 晶夫
国土交通省豊橋工事事務所 正会員 田中 茂信

1. はじめに

東海豪雨では、矢作川上流域においても未曾有の洪水となった。特に上流部に位置する岐阜・長野県域で総雨量400mm～600mmに達する既往最大雨量を記録し、岐阜県上矢作町等を中心に各所で山地部の沢抜けや森林からの流木の大量発生等、大規模な山地崩壊が発生したため、洪水に加え、流れ出た土砂や流木により、沿川の人家の全壊・流失・浸水、幼稚園や橋梁等の流失が発生し、上流域の生活基盤は壊滅状態となった。

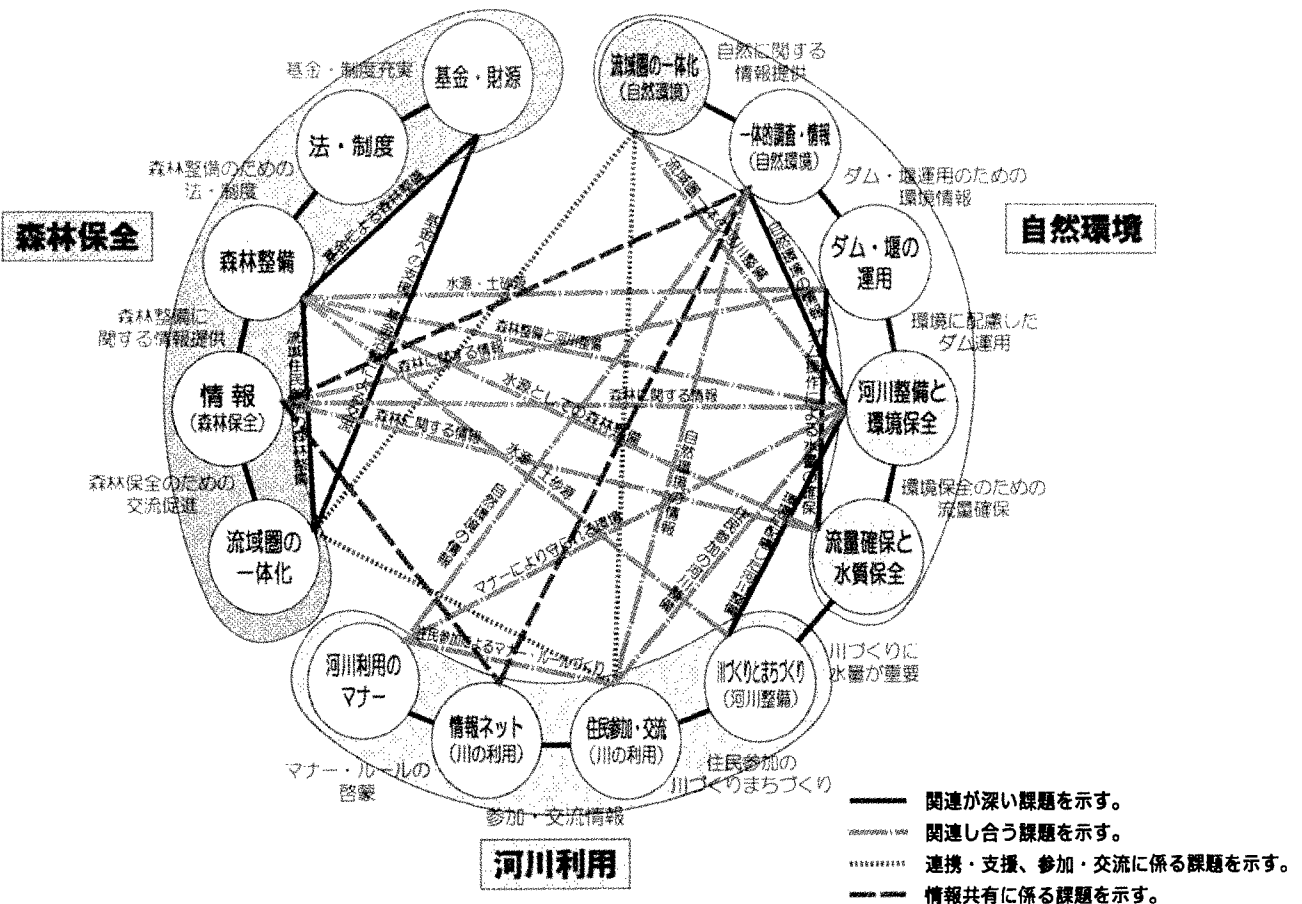
一方、大規模な山地崩壊や流出土砂等は、上流山地やその後の濁水の発生・長期化等により下流河川の自然環境へ大きなインパクトを与え、河川環境のみならず、流域の自然環境へも大きな変化が生じた。

「矢作川の環境を考える懇談会」では、東海豪雨を契機として、矢作川の河川環境の保全と整備について、関係者相互がこれらの情報を共有するとともに、今後の矢作川流域の管理のあり方や自然環境と調和した川づくりについて意見交換を行い、課題解決に向けた枠組み、今後のとりくみについて提案を行った。

本稿は、矢作川の環境を考える懇談会の開催概要とその結果をとりまとめたものである。

2. 懇談会の開催概要

懇談会は、学識経験者 2 名と矢作川沿川の 13 市町村、その他河川管理者を含む河川に関わる団体及び農林関係者の計 32 名で構成し、意見交換を行った。



図－1 課題とその相互関係

懇談会で出された課題は、図－１に示すように「森林保全」「河川利用」「自然環境」の３つのグループに分類することができた。

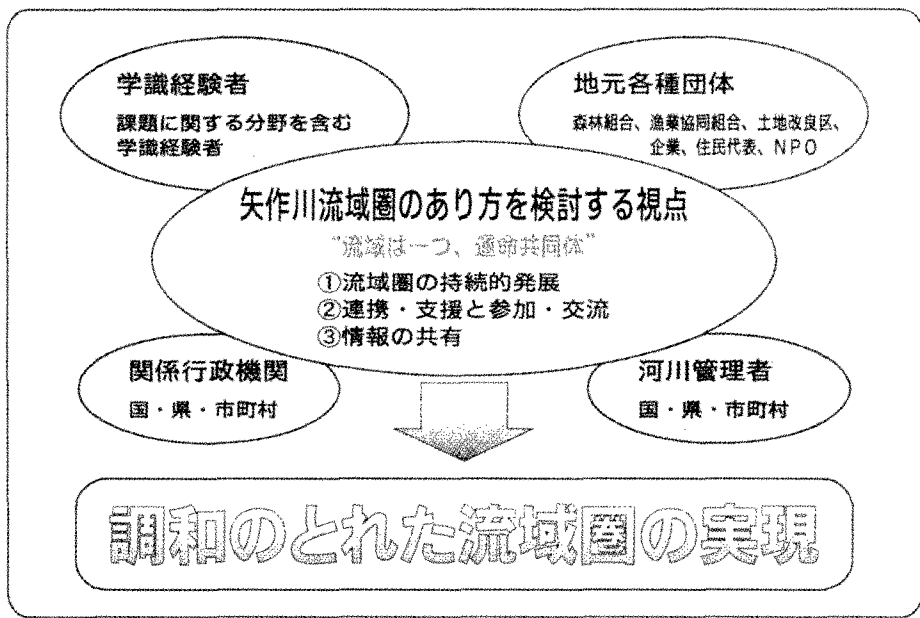
整理された課題は、グループ内での関わりがあり、他のグループと関わるものも多くある。

これらの課題の解決にあたっては、様々な課題がお互いに関連し合うため、個別の課題だけを考えていくのではなく、調和のとれた流域圏の実現が可能となるよう、矢作川の流域圏全体の視点で議論し、課題解決のための調整を図る必要がある。

3. 新たな枠組み

調和のとれた流域圏を実現するためには、個別課題については、各関係者が解決に向けて議論・努力することは当然のことながら、互いに関連し合う様々な課題を解決する方向性を示す「矢作川流域圏のあり方」を検討する必要がある。その視点としては、「流域圏は一つ、運命共同体」という共通認識のもと、「流域圏全体の持続的発展」を目指すことである。そのためには流域圏市民の「連携・支援と参加交流」及び「情報の共有」も欠かせない。

「調和のとれた流域圏の実現」に向けた「矢作川流域圏のあり方」の検討に際しては、「学識経験者」「地元各種団体」「行政機関」「河川管理者」等からなる新たな枠組み(図－２)により検討していく必要がある。



図－２ 新たな枠組み

4. まとめ

治水・利水に加え環境の視点が重要となる中で矢作川的环境を考える懇談会の開催により、沿川地域の環境に関する情報が共有できたと考えている。調和のとれた流域圏の実現に向けて、流域圏の骨格をなす矢作川が果たさなければならない機能は非常に重く、その運命を握っている。

このような認識から、矢作川流域圏の抱える課題を各関係者が共有し、「流域は一つ、運命共同体」という認識を共通のものにするため、幅広い視点から議論できるシンポジウムを平成１５年２月に行うこととしている。